

小山実稚恵の新シリーズ

「ベートーヴェン、そして…」

'19/ 6月23日スタート!



(C) Tetsuro Kameyama

シリーズは全6回(3年)で構成

- 第1回 2019年6月23日《敬愛の歌》
ベートーヴェン×シューベルト
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第28番
シューベルト：ピアノ・ソナタ第13番
シューベルト：幻想曲 作品90・作品142より
いずみホール S5000円・A 4500円(全席指定)
- 第2回 2019年11月24日《決意表明》
ベートーヴェン×モーツァルト
モーツァルト：デュポールの主題による変奏曲
モーツァルト：ピアノ・ソナタ第13番
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第29番
「ハンマークラヴィア」
いずみホール S5000円・A 4500円(全席指定)
*「第1回・第2回セット券」6000円+大阪新音会費

第1回券／1・2回セット券発売中

- 第3回 2020年6月(予定)《知情意の奇跡》
ベートーヴェン×バッハ
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第30番
バッハ：ゴルトベルク変奏曲
- 第4回 2020年11月(予定)《本能と熟成》
ベートーヴェン！
ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番「皇帝」
ほか(詳細は検討中)
- 第5回 2021年6月(予定)《結晶体》
ベートーヴェン×バッハ×モーツァルト
ベートーヴェン：6つのバガテル
バッハ：半音階的幻想曲とフーガ
モーツァルト：幻想曲(二短調 K.903)
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第31番
- 第6回 2021年11月(予定)《異次元へ》
ベートーヴェン×シューベルト
シューベルト：ピアノ・ソナタ第19番
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第32番

小山実稚恵コンサート、新シリーズへのいざない

「ベートーヴェン、そして…」って、どんな演奏会？

今の日本で、名実ともに最高のピアニストといわれる小山実稚恵の企画コンサートです。小山さんは2017年まで12年にわたり、全24回の連続コンサート「ピアノ・ロマンの旅」に取り組み、音楽界でひじょうに高く評価されましたが、それに続くシリーズです。企画・構成は、もちろん小山さん自身です。ベートーヴェンの“後期ピアノ・ソナタ”5曲（第28番から第32番まで）をプログラムの軸として、3年間6回にわたり展開していきます。

「そして…」は、何を意味している？

演奏会各回のプログラムは、もちろんベートーヴェンのピアノ・ソナタ第28番～第32番の各曲が主役ですが、加えて、ベートーヴェンの音楽に深い影響を与えた作曲家（具体的にはバッハとモーツァルト）と、ベートーヴェンから強い影響を受けた作曲家（同 シューベルト）の作品をとりあげ、第2の主役にしています。「そして…」というのは、それら作曲家との組み合わせを示しています。

3人の作曲家作品との組み合わせについて、小山さんは「ベートーヴェンと同等、もしくはそれ以上の作品と組み合わせることで、それぞれのすばらしさや個性を引き立たせることができる」からと、狙いを話しています。ベートーヴェンの“後期ピアノ・ソナタ”の単なるチクルスではなく、音楽家の系譜に沿ってピアノ音楽をたっぷり楽しんでもらおうという、小山さんの“仕掛け”です。

でも、なぜベートーヴェンなの？

ベートーヴェンはヨーロッパの音楽を大革命し、芸術として確立、後世の音楽家のお手本となりました（ゆえに楽聖と呼ばれます）。その作品は、今も世界の人々に生きる力を与え続けています。小山さんも「私自身ずっと、ベートーヴェンの魂の強さに引かれてきましたが、今あらためて、ベートーヴェンの生きざまが凝縮されたピアノ作品の、“後期ピアノ・ソナタ”を演奏し、聴いていただきたいという気持ちが高まってきたから」と、今回の企画の動機を話しています。シリーズのさなかの2020年は、ベートーヴェンの生誕250年です。

各回に、タイトルが付けられているけれど…

各回のタイトルは、それぞれの演奏会の主題（モチーフ）といえます。これも小山さんならではの深慮によります。各回タイトルは、演奏会の“こころ”を示すキーワードではありますが、それにとらわれず、素直に曲を聴いてください。

それでも、敷居がちょっと高そう

たしかに、ピアノの小品名曲を並べた“カジュアル・クラシック”コンサートではないので、お気軽に！というわけにはいきませんが、クラシック音楽やピアノに関心をもち始めた方なら、きっと良さが解っていただけるシリーズです。

シリーズ（大阪公演）の参加者にすてきなプレゼント

小山実稚恵のピアノ・シリーズ「ベートーヴェン、そして…」（大阪公演）に5回以上参加していただいた方に小山さん直筆の「サイン色紙」を進呈します。

また、「セット券」をお申し込みいただいた方、各回入場券の早期予約者の皆さんにも記念カード（検討中）をさしあげます。詳細は後日、発表します。



小山実稚恵さんのプロフィール

人気・実力ともに日本を代表するピアニストです。チャイコフスキー国際コンクール、シヨパン国際ピアノコンクールの2大コンクールに入賞し、今日までコンチエルト、リサイタル、室内楽と、常に第一線で活躍を続けています。

2006年から17年まで、12年間・24回にわたる壮大なシリーズ『ピアノ・ロマンの旅』（いすみホールほか各地でも開催は、その演奏と企画性において高い評価を受けました。

これまでに国内の主要オーケストラはもとより、チャイコフスキー・シンフォニー・オーケストラ、ベルリン交響楽団、ロイヤル・フィル、BBC交響楽団、ワルシャワ・フィル、モントリオール交響楽団など世界の著名オーケストラ、国際的指揮

者と数多く共演しています。協奏曲のレパートリーは60曲を超えます。

また、シヨパン国際ピアノコンクールをはじめ、チャイコフスキー、ロニティポー、ミュンヘンなどの国際コンクールで審査員も務めています。ソニーから30枚目となる「バッハ・ゴルトベルク変奏曲」をリリースしました。著書に「点と魂」。

2005年度文化庁芸術祭大賞、13年度東燃ゼネラル音楽賞、15年度文化庁芸術祭優秀賞、16年度芸術選奨文脈科学大臣賞を受賞。いすみホールでの演奏など、大阪での目覚ましい活動により、18年度大阪市民表彰を受けました。17年度紫綬褒章受章。

小山さんは大のネコ好きとか…ちなみに愛ネコの名前はララちゃんだそうです。[写真(C) Tetsuro Kameyama]



2018年7月31日・8月1日開催の「こどもの夢ひろば『ポレロ』」で、こどもたちと連弾をする小山さん(前列右)。指揮は広上淳一さん(同左) *写真はホームページから

小山さんは東日本大震災被災地での演奏活動を続け、仙台では自ら企画・立案したプロジェクト「こどもの夢ひろば『ポレロ』」を毎年開催しています。小山さんの最近の活動を紹介します。

▼2019年3月21日
NHK仙台放送局にて、震災関連のコンサート「震災から8年、復興への祈りをこめて」に出演しました。小山さんのピアノ演奏によるソロの演奏のほか、3月11日の星空を見上げた人々の体験記をアナウンサーが朗読、小山さんがそれに合わせて演奏しました。仙台で生まれ、盛岡で育った小山さんの被災地への想いは大変強く「これからも途切れることなく、被災地に寄り添う活動を行う」と話しています。

▼2019年7月27日・28日
「こどもの夢ひろば『ポレロ』」が今年も開かれます。今回、第5回を記念し、いちだんとパワーアップします。こどもたちの未来のために、ということでも今回もこどもたちと小山さんとの連弾をする予定で演奏することもを一般募集しています。

これを知れば“新シリーズ”はもっと楽しめる ①

音楽を聴くために宗教論は要りません。歴史も哲学も、音楽家の伝記も必須ではありません。楽しく聴ければそれで良いのです。でも、知っていれば（または探求すれば）音楽の楽しみ方が広がることも事実です。そこで、小山実稚恵ピアノ・シリーズ「ベートーヴェン、そして…」をもっと楽しむための“ミニ知識”を紹介します。（ただし、大阪新音企画チームの独善的紹介です）

ベートーヴェンの“後期ピアノ・ソナタ”って、そんなに有名？



ベートーヴェンのデスマスク

有名か、なんてものじゃありません。“超有名”です。

ベートーヴェン(1770~1827)は生涯にわたってピアノ・ソナタの作曲を続けました。全部で32曲になります。そこで、人生の節目に合わせてピアノ・ソナタも初期・中期・後期に分け、作品を理解する助けにしています。“後期ピアノ・ソナタ”は、1816年頃から没するまでの期間の作品群で、28番から32番がそれに当たります。“後期ピアノ・ソナタ”のうち、タイトル付きは第29番の「ハンマークラヴィーア」ですが、5曲ともベートーヴェンのピアノ作品の頂点、全作品の中でも最高レベルといわれるほどの傑作です。

では、何がすばらしいのか。ひとことで言うと「完成度」です。第28番は、古典派音楽からロマン主義への移行を示しています。第29番「ハンマークラヴィーア」は、全32曲のピアノ・ソナタの中でも超大作で(演奏時間は「運命交響曲」を超えます)、演奏技術もきわめて難しいことで有名です。第30~32番はベートーヴェンの最後の3大ソナタと呼ばれ、ベートーヴェンのピアノ芸術の着地点といえます。真髄は…、直接聴いて味わってください。

ベートーヴェンと、 バッハ・モーツァルト・シューベルトの つながりは？

小山実稚恵ピアノ・シリーズ「ベートーヴェン、そして…」は、ベートーヴェンの“後期ピアノ・ソナタ”とバッハ・モーツァルト・シューベルトの3作曲家の作品を組み合わせ、プログラム構成します。ベートーヴェンとそれら作曲家とのつながりを見てみましょう。

バッハは“神に仕えた音楽家”でした。神を讃え、天上の美を現出するために、さまざまな音楽的工夫をし、多くの作品を残しました。それらが後世の音楽的発展の基礎になりました。モーツァルトもベートーヴェンも、たとえば平均律やフーガ技法など、バッハ作品を勉強し研究することで、自分の音楽に磨きをかけました。

モーツァルトは“音楽職人”であり、このうえもなく美しい、あるいは楽しい音楽を作り出す名匠でした。ベートーヴェンとはほぼ同時代で、先に人気を博していたモーツァルトを意識し、その作品も大いに研究したようです。ただ、ベートーヴェンは自負心が強く、モーツァルトとは異なる路線を歩きました。それにより、音楽が芸術として確かなものとなりました。

シューベルトはベートーヴェンを崇拝するほどに敬愛した音楽家です。ベートーヴェンをなんとか越えようとしたが、十分に果たせぬまま早世しました。それでもベートーヴェンの影響を受け、ロマン主義音楽の開拓者となりました。



バッハ
1685~1750



モーツァルト
1756~1791

大いなる
啓発・刺激



ベートーヴェン
1770~1827

多大な影響



シューベルト
1797~1828